富田林市遺跡調査会報告 2

太郎池遺跡

1996. 8

富田林市遺跡調査会

富田林市遺跡調査会報告２「太郎池遺跡」　　正誤表

はじめに

（誤）「平成９年３月」

（正）「平成８年８月」

奥付

（誤）発行年月日　1997年３月31日

（正）発行年月日　1996年８月31日

（誤）枠外　1997.300

（正）　　1996.300

太　郎　池　遺　跡

発行年月日　1996年８月31日

編集・発行　富田林市遺跡調査会

住　　所　富田林市常盤町１番１号

印　　刷　橋本印刷株式会社

1996.300

はじめに

富田林市は、市域の中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。その中央部である石川によって形成された平野部には、多くの遺跡や街並みで富田林寺内町などがのこり、古くから人々の営みが行われていたところです。

本書は、民間住宅建設のため本調査会が平成７年度に実施しました、太郎池遺跡の発掘調査の報告書です。

今回の調査では、これまで市内での出土例が少なかった縄文土器なども見つかり、石川中流域における縄文時代の生活を解明する一助になるのではないかと思います。

最後になりましたが、調査に際しまして多大な理解とご協力をいただきました関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成９年３月

富田林市教育委員会
教育長　清　水　冨　夫

例　　言

１．本書は民間住宅建設にともない富田林市遺跡調査会が平成７年度に緊急発掘調査を行った太郎池遺跡の調査概要である。

２．調査は平方扶左子を担当者とし、現地調査は平成８年２月２日から３月19日にかけて実施し、現地調査後に内業調査を行い、本書の刊行をもって終了した。

３．本書の執筆・編集は平方扶左子が行った。

４．調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の方々に協力を得た。
秋山敦子、岩井節子、岩瀬訓子、北野千穂、楠木理恵、瀬戸哲也、瀬戸直子、
仲井和代、西澤寿子、前野美智子、松本友美、山本節子、湯元剛、矢野早苗

５．出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　調査の成果 …… 1
　自然流路 …… 1
　Ⅰ区 …… 2
　Ⅱ区 …… 2
　Ⅲ区 …… 2
　出土遺物 …… 2
　Ⅰ区 …… 2
　Ⅱ区 …… 3
　Ⅲ区 …… 3
Ⅲ　まとめ …… 4

挿　図　目　次

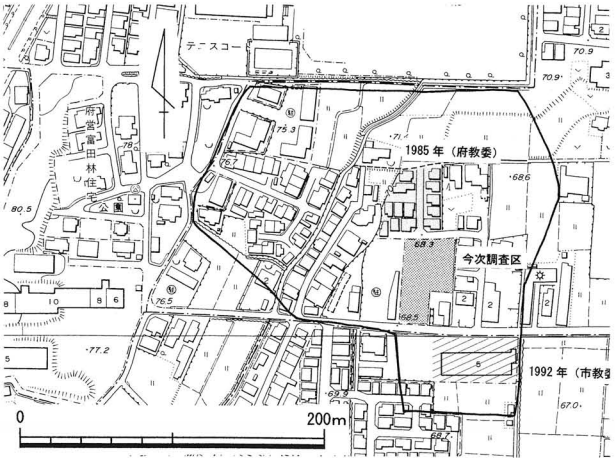
第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　調査区配置図 …… 1
第３図　遺構平面図 …… 2
第４図　出土遺物 …… 3

図　版　目　次

図版１
（上）Ⅰ区・Ⅱ区完掘全景（東から）
（下）Ⅲ区完掘全景（南から）

Ⅰ　調査に至る経過

富田林市は大阪府の南東部に位置し、南北約10km、東西約6.5kmの距離を有し、39.66km²の市域面積をもっている。市域のほぼ中央に石川が北に流れている。この石川によって形成された低位及び中位の河岸段丘が両岸に発達しており、特に東岸に集落遺跡が顕著に見られる。



第１図　調査地位置図

太郎池遺跡は、市内の中央部にあって、国道170号線（大阪外環状線）と旧国道170号線に挟まれた大阪府立河南高等学校の南に広がっている。その規模は、南北400m、東西600mにおよぶ。遺跡の内容については、富田林市教育委員会や大阪府教育委員会の調査の結果、弥生時代から中世に至る複合遺跡であることがわかっている。

今回の調査は旧国道170号線と国道170号線（大阪外環状線）を東西に結ぶ市道の北側を、分譲マンションの建設に伴い発掘調査を実施した。

調査は、平方扶左子を担当者とし、平成８年２月２日から３月19日にかけて現地調査を実施した。

Ⅱ　調 査 の 成 果

調査の対象は、建物部分、浄化槽部分の約920m²とし、調査区をⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。調査の進行上、Ⅰ区、Ⅱ区を前期に、Ⅲ区を後期に調査した。

基本的な堆積層は、６層である。第１層（耕土）および第２層（床土）は、近現代の水田堆積で、約25～30cmの厚さである。第３層（灰黄色粘質土）および第４層（黄灰色粘質土）は、約10～25cmの厚さがあり、旧水田の堆積で近世の遺物を含んでいる。第５層（濁灰黄色粘質土）および第６層（濁黄灰色）は、約10～25cmの厚さで堆積している。Ⅰ区の北側では第６層がなく、Ⅲ区の第６層が厚く堆積していることから、北西から南東に地形が傾斜していることがわかる。

第２図　調査区配置図

自然流路

本調査地全体にかけて、長さ約50m分の自然流路を検出した。北西と南西の比高は0.39mで南東に流れる。流路の規模はかなり大きいが、埋土の堆積状況からみると、独立した２本の流れがあり、冠水のため最終的に１本の幅の広い流路になった状況が観察できる。流路内での堆積は、大きく４層に分けられる。埋土は上から、

第１層が濁灰褐色土、第２層が黒褐灰色粘質土、第３層が濁灰白黄色粘質土、第４層が濁灰黄色砂である。流路は最終的には濁灰褐色粘質土と黒褐灰色粘質土でおおわれているが、濁灰白黄色粘質土と濁灰黄色砂のある堆積は常に流れていて大きく蛇行しながら流れていた状況がわかる。

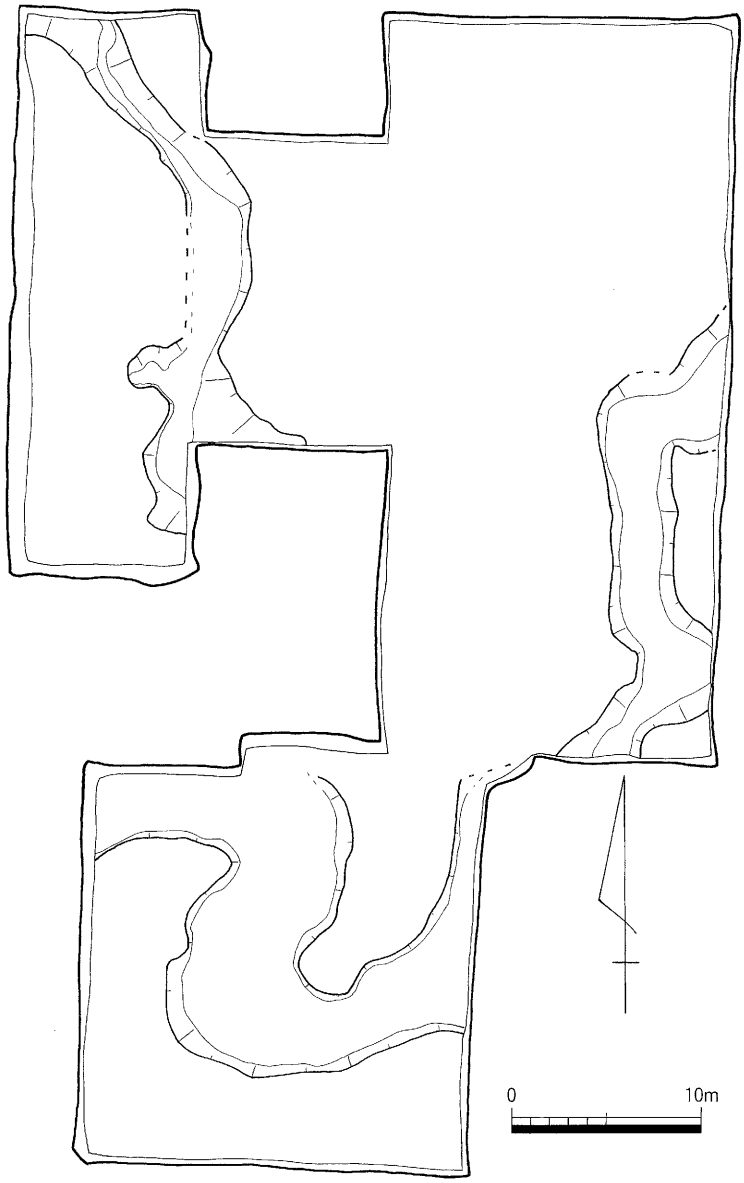
また、本流付近の地山面で、約２～５cmの円形及び楕円形の哺乳動物の足跡を検出した。

Ⅰ区

調査区北側中央部から東側中央部にかけて、南北にのびる自然流路を検出した。本流は調査区北西部で、最大幅約6.3mをはかる。深さ約0.39m、北西と南東の比高は、約0.13mで南東に流れる。

Ⅱ区

本流は調査区中央部で検出され、最大幅約5.8mをはかる。深さは0.42m、北西と南東の比高は約0.06mで東に大きく蛇行しながら調査区東側中央部に流れる。



第３図　遺構平面図

Ⅲ区

Ⅰ区で検出された自然流路は、Ⅲ区中央東西方向で確認した。本流は、最大幅約4.76m、深さは0.56m、北と南の比高は約0.05mで南に流れる。本流は二股に分かれて、一方は濁灰黄色砂の堆積があり、溝は常に流れていた状況がみてとれる。一方は調査区東端に、もう一方は、調査区中央南端にのびている。流路が合流した部分には布留式土器や木片が出土した。合流した西側、調査区の南西端の地山面には、多量の炭片が含まれていた。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、庄内式土器、布留式土器、瓦器、瓦、製塩土器、サヌカイト、鉄製品がある。以下、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区の調査区別に、遺物を概観する。

Ⅰ区

自然流路

第１層　須恵器（１・４）、土師器、瓦器、製塩土器、サヌカイト剥片（11）が出土している。須恵器は、

坏身２点出土している。土師器は皿が出土している。瓦器は椀の底部が１点、口縁部が６点出土している。

第２層　須恵器、土師器、鉄製品、サヌカイトが出土している。どれも細片のため器種は不明である。

第４層　サヌカイト剥片が出土している。

Ⅱ区

自然流路

第１層　須恵器、土師器が出土している。土師器は皿、甕の口縁部が出土している。

第２層　土師器が出土している。どれも細片のため器種は不明である。

第４層　縄文時代晩期の深鉢（８）が出土している。

Ⅲ区

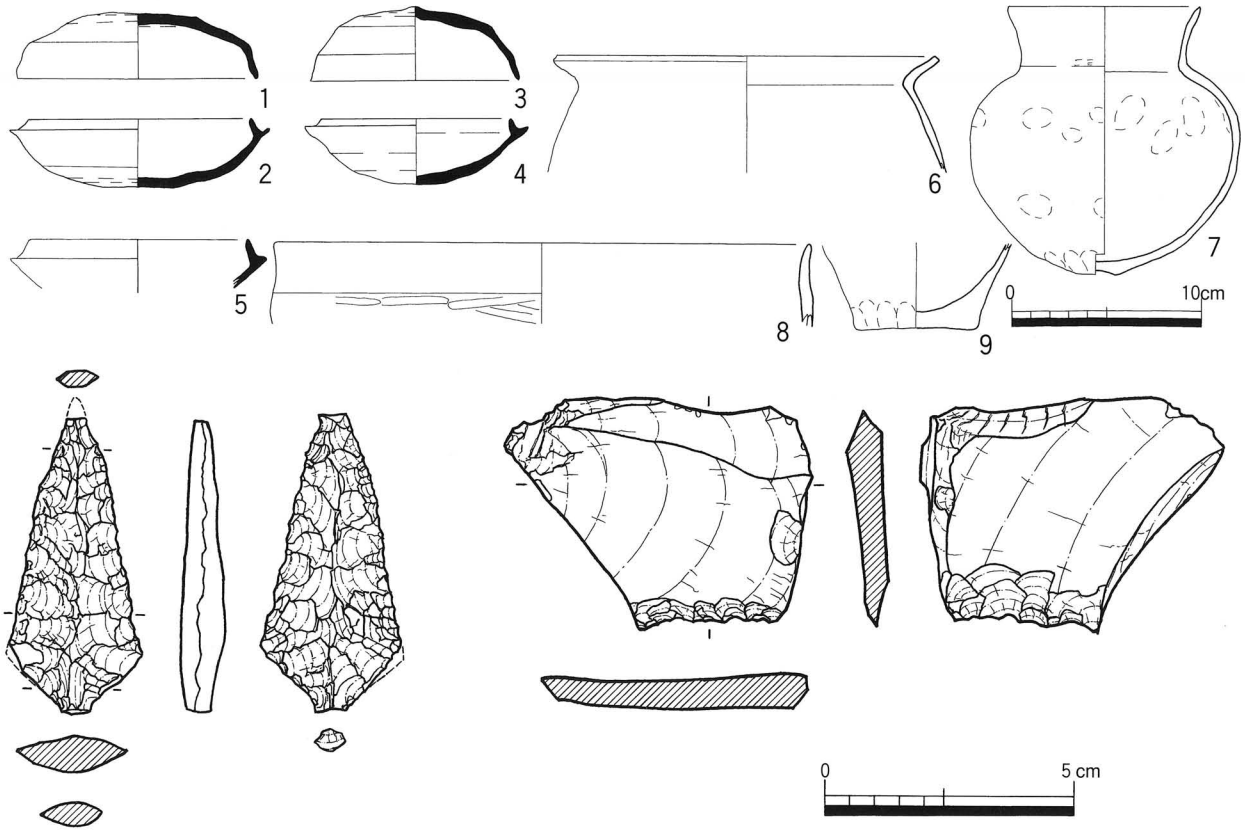
自然流路

第１層　須恵器、土師器、瓦器が出土している。どれも細片のため器種は不明である。

第２層　須恵器（２・３・５）、土師器、サヌカイト剥片が出土している。須恵器は、坏蓋２点、坏身が１点出土している。サヌカイトは有舌尖頭器（10）が１点出土している。

第３層　弥生土器（６）、庄内式土器（７）が出土している。弥生土器は甕１点出土している。庄内式土器の甕が１点出土している。

第４層　弥生土器（９）、布留式土器、木片が出土している。弥生土器は底部しか出土していないため器種は不明である。



第４図　出土遺物

Ⅲ まとめ

太郎池遺跡は、1986年に住宅建設に先立って大阪府教育委員会によって試掘調査が行われ、自然流路が検出された。その後、1992年に富田林市教育委員会による発掘調査によっても、自然流路が検出された。

本流は、調査区北西端から南東端に向かって蛇行しながら流れ、自然地形に沿って、西の羽曳野丘陵から東の石川に向かって流れていたと推測される。第４層目には縄文土器が出土していることから、この時代に機能していて、鎌倉時代には流路としての機能が失われたものと考えられる。

また本流の付近には、約２～５cmの円形および楕円形の哺乳動物の足跡が検出された。

図版

Ⅰ区・Ⅱ区完掘全景（東から）

Ⅲ区完掘全景（南から）

報告書抄録

ふりがな	たろういけいせき
書名	太郎池遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	富田林市遺跡調査報告
シリーズ番号	2
編著書名	平方扶左子
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584－8511 大阪府富田林市常盤町１番１号　☎0721－25－1000
発行年月日	西暦1996年８月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
太郎池遺跡 たろういけいせき	富田林市 とんだばやしし	27214	37	34° 29′ 38″	135° 35′ 41″	1996. 2.2 ～3.19	920m²	民間住宅建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太郎池遺跡	その他	縄文～ 古墳時代	自然流路・哺乳動物の足跡	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石器	哺乳類の足跡を検出

太 郎 池 遺 跡

発行年月日　1997年３月31日
編集・発行　富田林市遺跡調査会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

1997. 300